

大正期における女性皇族像の転換

——良子女王をめぐる検討

森 暢 平

キーワード：久邇宮良子女王、裕仁皇太子、皇族像、大衆天皇制、御成婚、婦人雑誌、『婦女界』、宮中某重大事件、皇室写真撮影の規制緩和、マスメディア、活動写真、絵葉書

はじめに

図1、2は当時19歳の久邇宮良子女王くにおのみやながこ（のちの香淳皇后）の図像である。裕仁皇太子（のちの昭和天皇）との婚約が正式となる直前の良子は1922年6月10日、妹宮である信子女王ら家族とともに、千葉県幕張海岸へ潮干狩りに出かけた。図像は多色刷り（カラー）であり、各新聞が大きく取りあげた写真を、模写した絵葉書である。桃色を基調とした着物、黄色地の帯が、青い海と空に映えている。着物を膝下までからげているところが印象的だ。前時代であれば「はしたない」と取られかねない行動を、若い女性皇族が躊躇なく、楽しそうに行っているさまは、当時の言葉でいえば「平民性」を感じさせる。良子は、7人の親王・内親王を産み、皇統つまりは天皇家というイエを守ることに専念した女性としての印象が強い。夫を支え、次代の皇族を生み、育てる役割を果たしたイメージである。しかし、図1、2を見ると、そうした良妻賢母型のイメージは彼女の一面にすぎず、大正期には、若々しく、活発な女性として表象されていたことが分かる。「女性は何事も慎ましやかに」という保守的な価値観からやや外れる行動を厭わない積極的な女性であると見られていたのである。

名望家社会から大衆社会へと転形していく大正期にあって、若い女性皇族は、芸能界のスタアのように新聞・雑誌・絵葉書、あるいは活動写真のなかに出現しはじめる。そのなかで、民衆に人気があった裕仁との



図1 潮干狩りをする良子



図2 後ろを歩くのは妹宮・信子

結婚が予定されていた良子の露出がもっとも多かった。肖像、記念写真のなかでしか見られなかった女性皇族が、動きのあるスナップ写真のなかで見られようになる。皇族像の転換の先頭に立っていたのが、彼女であった。しかしながら、こうした良子像は長く忘却されてきた。

民衆が皇族をスタアのように扱う現象、あるいは、皇室の世俗的な人気を天皇制支持の基盤になる現象は、大正期にもあった。こうした状況を「戦前期『大衆天皇制』」と位置づけたのは、右田裕規である¹⁾。「大衆天皇制」とはもともと、1958年から翌年にかけての正田美智子／美智子妃をめぐるブームのなかで、松下圭一が定型化した用語である²⁾。松下の議論のポイントは、大衆社会状況の出現、天皇制への世俗的関心の増大という要因が、天皇制の支持拡大の基盤になったと主張する点である。これに対し、右田は社会の大衆化、近代化、マスメディアの発達など皇室人気を支える条件は戦前期に見いだせることを体系的に明らかにした。戦後特有の現象と捉えられてきた「大衆天皇制」議論を、戦前に延伸させたのである。

右田は、「戦前期『大衆天皇制』」を「萌芽期」（1890年代）、「展開期」（1900年代-1910年代）、「開花期」（1920年代-1930年代前半）、「戦時期」（1930年代後半-1940年代前半）に分け、それぞれの異同を大まかに捉えるスタイルを採用している。長いスパンの変容を見る目的のため具体的な局面の分析は多くはない。たとえば、本論文と関係する1920

年代については、皇室を平民として見ようとする「平民主義」、容貌やファッションが注目される「スター化」が進む時代と位置づける。時代の「総体的傾向」を捉えることが右田の戦略である。しかし、ひとつの出来事と他の出来事が関連づけられていない弱点がある。一例をあげれば、本論文が扱う1921年における皇室写真撮影の規制緩和（右田論文では「開放政策」）について、その前後で皇室記事・写真がどう変わったのかについての分析はなされていない。

本論文は右田論文の弱点を補い、右田の考察をさらに発展させるため、久邇宮良子という限定された対象を扱う。さらに、1921年の宮中某重大事件、1923年の久邇宮家の中四国・九州・関西旅行の2つの出来事を取りあげる。右田の議論を引き継ぎながら、右田とは逆に対象を限定することで、「大衆天皇制」化の様相を具体的に浮き彫りにできると考えるためである。

本論文が、良子を取りあげるのは、大衆社会化のなかでの皇族像の転換が、どのような社会的条件、どのような政治過程から生じ、それを民衆がどう受け止めたのかを明らかにする最適の題材と考えるためである。独身時代の良子は、皇室写真撮影の規制緩和という政策転換をはさんで存在する。明治を引きずる大正前期と、昭和へつながる大正後期の間に登場した彼女は、女性皇族像転換の象徴的存在であるのだ。

本論文は良子イメージの分析を中心とするが、戦前の女性皇族像についてはいくつかの先行研究がある。ひとつは、若桑みどりの『皇后の肖像』である³⁾。若桑は、昭憲皇太后（明治天皇の後）が夫の陰に控える良妻賢母型の主婦として描かれることを明らかにした。その一方、看護、軽労働、教育といった女性が社会で果たすべき役割を示したと若桑は論じる。「女性を国民化」という政治的目的に沿った形で、理想の妻としての皇后像が描かれたという。若桑はたとえば「皇后の完璧な洋装やアクセサリは国民を圧倒し、賞賛と羨望と憧憬を生みだした」と民衆の欲望にも目配せしてみせる⁴⁾。しかし近代国家設立過程における支配者の意図を画像から読みとることに主眼がおかれ、支配者と画像を描く者の意図のズレや、支配者の意図と受けとる者の欲望の乖離を比較的軽視しているように感じられる。

また、男性を含む天皇・皇族像を大正期から戦時期まで扱った研究には、伊藤之雄の『昭和天皇と立憲君主制の崩壊』がある⁵⁾。伊藤は、大

正後期の裕仁のイメージを「平民」化、「健康」、「科学」化とまとめ、中産階級の振る舞いに近い行動を見せていたことに注目した。しかし、昭和期に入るとしだいに軍服以外の服装の写真が報道されなくなり、神秘的な大元帥イメージに変化すると論じた。本論文との関連で良子に関する点について見れば、大正期の彼女にはモダンで健康的なイメージが存在したが、昭和期に入ると、裕仁の大元帥イメージの強まりとの相関で、良子の存在感も低下することを実証した。ただ、伊藤の研究にも若桑と同じ弱点がある。すなわち、新聞上のイメージは支配者の意図の直接の反映であり、そのイメージを民衆がそのまま受容したという前提の問題である。

本論文の前提は、これらの先行研究と異なり、為政者の意図がそのままイメージに反映するわけではないという点にある。社会変動のなかで人びとの意識が変わり、図像を求める民衆の欲望も変化する。さらに、マスメディアであるがゆえの商業的要因、ジャーナリズムであるがゆえの報道の論理も介在するはずである。また、支配者内部の力学、支配者とジャーナリズムとの間の軋轢も働いたであろう。皇族像が転換するのはある日突然、当局がイメージ戦略を変えたからではない。むしろ、諸力のせめぎあいのなかで、新たなイメージが形成され、移行していくのである。

本論文は、若桑が扱った明治の女性皇族像、伊藤が関心の中心とする戦時期の天皇・皇族像のはざま、大衆社会が本格化する大正期を扱う。大正期は、肖像からスナップ、あるいは、無表情から笑顔の図像への変化の時代といえるだろう。本論文はそうした視点から良子像を取りあげ、それがどのような社会的条件、政治過程のなかで生まれ、民衆は新しい像をどう見ようとしたのかを考えていく。

本論文は3つの節からなる。1節は、第一次大戦後に起きた女性皇族像の転換の様相を、婦人雑誌『婦女界』の口絵写真の内容分析から明らかにする。良子像が、それまでの女性皇族像とどう異なり、何が新しいのかを確認し、転換の条件を考えるためである。つづく2節は、良子の図像が増加した契機として宮中某重大事件について考察する。転換の社会的条件を考える1節と異なり、政策決定過程を見ていく。ただしその目的は、決定過程そのものに関心を向ける政治学とは異なり、大正期の天皇制がもはや一部特権勢力だけで重要事を決められなくなったことの

実証にある。つづく3節では、中四国・九州・関西旅行を取りあげる。一家を迎える地方の人びとがどう奉迎したのか、マスメディアがそれをどう報道し、人びとがそれをどう受け止めたのかを見ていく。

婦人雑誌の内容分析を中心とする1節、当局者日記を一次史料としながら新聞（東京紙）を利用する2節、地方紙と地方官衙の行政文書を読み解きながら、歴史史料としての図像を取りあげる3節と、本論文は方法論的には不統一な印象を与えるかもしれない。ただ、女性皇族像の転換をさまざまな面から見ることでその総体を明らかにするという目的から、敢えて選んだ戦略であることを明記しておく。

1. 画期としての良子像

この節は、女性皇族像の転換の具体例としての良子像を、婦人雑誌『婦女界』のなかで見ていく。そのうえで転換がなぜ起きたのかという社会的条件を考えていきたい。婦人雑誌を取りあげるのは、女性の意識の変化が誌面に反映されると考えるからである。『婦女界』は1910年、同文館が創刊し、1913年からは婦人之友社出身の都河^{しげみ}龍の婦女界社が発行権を引き継いだ雑誌である。同誌を分析対象とするのは、婦人雑誌のなかで、皇室を取りあげることがもっとも多く、かつ、3節で扱う久邇宮家による中四国・九州・関西旅行に記者を同行させ、活動写真を撮影しているためである。同誌は1924年ごろ、『主婦之友』（主婦之友社、23-24万部）につぐ、婦人雑誌2番目の部数（21-22万部）を誇っていた。つづく3位は『婦人世界』（実業之日本社、17-18万部）である⁶⁾。『主婦之友』につぐ影響力の強い婦人雑誌であったにもかかわらず、研究の対象になる例は少ない。

大正時代は婦人雑誌が飛躍的な部数増加を見せた時代であった。『婦女界』は1913年、月平均約1万2000部が発行されていたが1922年には約20万1000部まで増えている⁷⁾。部数増加には、大正期における新中間層の増大という要因があるだろう。年収が800円から5000円の「中等階級」は1925年、全世帯約1200万のうち約140万世帯（11.5%）になった⁸⁾。また、同じ時期、女子中等教育の充実が高等女学校の卒業者を増加させた。1913年、1万163人であった高等女学校卒業生は、1926年には5万9169人と6倍近くまで伸びている⁹⁾。大正デモクラシー、

自由主義、民本主義の思潮がさかんなか、中等教育の機会に恵まれた新中間層の女性は、良妻賢母の名のもとに女性の自由が抑圧されていた従来の家庭文化に疑問を持ち、社会的活動の可能性を模索しはじめた¹⁰⁾。それが職業婦人への注目となって現れるのである。

ところで、婦人雑誌は階級的立場に立つ左翼系を除くと、一般に保守的傾向を持つ『主婦之友』『婦女界』などの実用系大衆誌と、モダニティに対して積極的な『婦人公論』など論壇誌に分かれるとされる。ところが、木村涼子は、『主婦之友』の内容分析を通じて、同誌が「女性は男性に従うべきだ」という封建的家族像を描く一方で、性道徳の男女平等、家庭内の平等のような権利をも併せて主張している二面性を明らかにした¹¹⁾。同じ実用系婦人雑誌である『婦女界』にも同様なことがいえるであろう。たとえば「婦人職業案内号」と題した1921年5月号では、歯科医、教師、事務員、タイピスト、看護婦などの職業を得るまでの読者の体験談が掲げられる一方で、自由な男女交際の危険性を説く鳩山春子の論説が掲載されている。『主婦之友』『婦女界』のような実用系婦人雑誌は、儒教的な古い道徳を組み込んだうえで、新しい生き方を模索する近代女性を理想としていたのである。

笑顔の良子女王

婦人雑誌をめぐる上記の状況をふまえ、本節は『婦女界』の分析を行う。具体的な方法としては1918年から1923年まで、同誌の口絵に掲載されたすべての写真から13歳以上の女性皇族が撮影された32点を抽出し、その形態などを調査した¹²⁾。形態とは、写真館などで撮影された肖像写真なのか、人物がカメラに対して身構えた記念写真なのか、公的場面を報道目的で撮影した写真なのか、あるいは、緊張がとれた日常の姿（カメラを意識しない姿）を撮影したスナップ写真なのかを判定したものである。さらに、写真が女性皇族の婚約・結婚を契機に掲載されたものかどうか、また女性皇族が笑顔かどうかも判定した。

その結果が表1である。一見して分かるのは1921年までと1922年以降の断絶である。1921年までは肖像写真、記念写真や、公的場面の報道写真ばかりであった。しかし、1922年以降、スナップ写真が現れ、さらに結婚関連の写真が増える。これは、1923年に良子が結婚する予定であり（関東大震災のため1924年に延期）、前述したとおり、同誌が

表1 『婦女界』のなかの女性皇族（1918年から1923年）

年	月	皇族名	写真の 形態	結婚 関連	笑顔	説明
1	2	東久邇宮妃聡子内親王	肖像			
2	3	久邇宮良子女王、信子女王	肖像	○		久邇宮智子女王も同じページに
3	5	久邇宮倪子妃、良子女王	公的場面			入京、東京駅で。邦彦王も一緒
4	7	東伏見宮周子妃	記念写真			閑院宮寛子・華子女王と一緒に
5	9	梨本宮伊都子妃、方子女王	記念写真			規子女王と一緒に
6	1	梨本宮方子女王	肖像	○		李垠との結婚を前に。同ページに李垠の写真も
7	4	東伏見宮周子妃	公的場面			夫と一緒に。晩餐会場への入場
8		竹田宮妃昌子内親王	肖像			
9	6	閑院宮智恵子妃	公的場面			夫と一緒に。見舞いの帰り
10		梨本宮伊都子妃	公的場面			弔問の帰り
11		竹田宮妃昌子内親王ほか	公的場面			葬儀行列
12	7	貞明皇后	公的場面			東京奠都50周年、馬車上
13	9	東伏見宮周子妃、久邇宮倪子妃、梨本宮伊都子妃	公的場面			芝浦に係留、捕獲したドイツ潜水艇見学
14	1	梨本宮伊都子妃	公的場面			入京、東京駅で
15	6	李方子女王	公的場面	○		出京、東京駅で。李垠と一緒に
16	12	久邇宮良子女王、信子女王、伏見宮敦子女王ほか	公的場面			創建された明治神宮参拝
17	5	久邇宮倪子妃ほか	公的場面			ドイツから押収した飛行機の台覧
18	6	朝香宮妃允子内親王	肖像			
19	7	梨本宮伊都子妃	肖像			
20		梨本宮規子女王	肖像			
21	10	久邇宮倪子妃、良子女王、信子女王、智子女王	記念写真			家族と記念写真。邦彦王と一緒に
22	5	貞明皇后	公的場面			九州行啓
23		同上	公的場面			観桜会。裕仁皇太子、英国皇太子と一緒に
24	6	賀陽宮佐紀子女王	肖像	○		結婚を前に。同じページに夫となる山階宮武彦の写真も
25	7	久邇宮良子女王	肖像	○		結婚勅許を前に
26	10	山階宮妃佐紀子女王、賀陽宮敏子妃	スナップ	○	○	それぞれの夫と一緒に。ともに新婚
27		久邇宮良子女王、信子女王	公的場面	○		中四国・九州・関西旅行。三重・二見ヶ浦
28	7	同上	スナップ	○	○	自宅でテニスなど
29	同上	同上	スナップ	○		中四国・九州・関西旅行。登山など
30	8	同上	スナップ	○		同上。鹿に餌やりなど
31	同上	同上	スナップ	○	○	同上。列車内食堂車など
32	11	同上	記念写真	○		震災被災者に衣服をつくる



図3 旅行中、列車の食堂車でくつろぎ笑顔を見せる良子

良子の中四国・九州・関西旅行に同行記者を派遣したことも大きい。表1の27から31までは、活動写真の一コマを切りとったもので、1点をのぞくとすべてスナップショットである¹³⁾。

ほかに、1921年までは3件しかなかった結婚関連写真が、1922年以降、9件と急増していることが注目される。良子と同じ時期、賀陽^{かやの}宮佐紀子女王（結婚して山階宮佐紀子）ら結婚が間近な独身女性皇族が

誌面に現れることが多くなった。坂本佳鶴恵は、『婦人世界』の巻頭口絵写真の内容分析から、大正中期（1917年から1921年）、同誌で皇族妃の扱いが減少する傾向を明らかにした。それ以前は多かった皇族妃の洋装ドレス姿の肖像写真が徐々に見られなくなるというのだ¹⁴⁾。婦人雑誌の口絵は、読者にまったく手の届かない既婚の女性皇族の姿から、女優を中心とした未婚女性に移っていくという。表1は、この先行研究と同じ傾向、すなわち、関心が未婚の女性皇族に移っているさまが見とれる。

さらに注目すべきは、1922年以降、笑顔の写真が増えたことだ。表1の26の山階宮佐紀子、賀陽宮敏子の場合、ややはにかんだ程度であるが、表1の31の良子は満面の笑顔である（図3）。一般的に、皇族の肖像写真は表情のなさが特徴であった。人間性や個性を表出させると、皇族の弱さ、平凡さ、凡庸さを表してしまう。個人的な身体性を希薄にするための無表情は西洋王族の肖像画からの伝統がある。ところが、笑顔の写真は現実の時間と空間のなかで、被写体が感情を露にしている。読者は、その明朗快活さを親しみを込めて見つめることができる。

良子は、『婦女界』のなかで満面の笑顔を見せる初めての女性皇族であった。それも裕仁との「婚約」によって露出が多くなっていく。肖像、記念写真から笑顔のスナップへと皇族イメージを転換させ、読者が親しみを感じることができるよう新しい女性皇族であった。ただ、『婦女界』の活版ページでの良子は、慈悲あふれ、修養を怠らない人物であるとして、

その「婦徳」が強調される¹⁵⁾。『婦女界』自体の保守とモダニズムの二面性と同様に、良子の「新しさ」は伝統的な価値観が許す範囲内であったことにも留意しなければならない。

皇室写真撮影の規制緩和

女性皇族像の上記のような転換はなぜ起こったのだろうか。まずあげられるのは、繰り返すようだが、女性をめぐる価値観のシフトである。日露戦争、第一次大戦を経て、女性が就ける職域は広がり、因習的な価値観よりも、新しい生き方を求める女性が増加した。婦人雑誌は商品であるがゆえに、女性たちの欲望や生活を反映する。既婚の女性皇族の畏まった肖像よりも、若い女性皇族の活発な姿に、自分たちを投影しやすくなった、あるいはそういう読者が増えたということだろう。

さらに、マスメディアの変化という条件もある。『大阪毎日』『大阪朝日』が100万部を超えるのは1924年であった。出版の世界でも『キング』など大部数を誇る雑誌が出現する。メディアの巨大化に伴い、紙誌面の大衆迎合主義も強まる。オピニオンジャーナリズムから社会面中心の報道、娯楽性の重視という変化である¹⁶⁾。読者の増大のなかで、当局もマスメディアの要望、さらに背景にある民衆の欲望を無視できなくなった。そのなかで、民衆が見たい対象として新しい女性皇族像が登場してくる。

これらの社会的条件を背景にしながら、皇族写真をめぐる転換の直接の要因には、当局による規制緩和がなされたことがある。先行研究が明らかにしているとおり¹⁷⁾、内務省は1921年7月8日、宮内省に対し「行幸啓ノ節鹵簿撮影其ノ他ニ関スル件照会」と題した文書を発出し、皇室写真は大幅な規制緩和へと動いていく¹⁸⁾。天皇一家の写真は従来、馬車か人力車に乗っているときのみ許可し、それ以外は撮影できなかった。公的場面を動きのなかで撮影する場合、規制の外側、つまりかなり遠くから撮影しなければならず、表情までは写せなかった。

規制緩和はこれを改めた。一般写真の場合、「徒歩または乗馬」の際でも不敬にならない限り撮影してもよく、活動写真でも事前に官憲の許可を得れば、撮影可能となったのである。緩和措置が一般に知られるようになったのは1921年8月23日、内務省警保局が全国担当者を集めた警衛会議を開いたときである。『東京日日』（1921年8月24日）は、活

動写真以外の一般写真は「総ての場合に撮影しても構はない事になった」と報じた。公文書中には「徒歩または乗馬」の際の撮影が可能と書いてあるが、運用上は、不敬でない限り、撮影状況による制限はなくなったと解されたのである。宮家皇族の場合、公文書上も制限はほぼなくなった。

こうした変化は、大衆社会化という時代の変化に対応し、内務省が変わったことによるところが大きい。同省は社会局新設など新たな政策を打ち出し、伝統的な治安対策を再検討していった。小橋一太内務次官と内務省社会局高官は1921年5月から、皇室政策について宮内省と協議をはじめ、皇室と国民との新しい関係について具体的検討に入った。その検討事項のひとつが、「厳格な場合」に限っていた撮影規制の緩和であった（『東京毎日新聞』1921年6月13日）。

『婦女界』の変化

こうした動きは、婦人雑誌の取材に直接影響した。前述のとおり規制緩和措置が一般に知られるようになったのは1921年8月24日の新聞報道であった。報道を受けた『婦女界』は記事の翌日（8月25日）、久邇宮家が静養中の箱根湯本に記者を急行させた。同誌記者が報道を引き合いに撮影を依頼すると、応対に出た久邇宮家の属官、^{わけべもときち}分部資吉は、「あれ〔内務省の新方針〕によると、新に例が開かれるわけですから、宮様方さへお許し下されば、出来ないわけはないかも分りませんが、何分まだ今日までは、そんなことは、一度も行はれた例がないですからね」と

返答。翌日、良子の父・久邇宮邦彦王（以下、久邇宮と表記）の許しを得て、一家5人がくつろぐ姿を旅館で撮影し、誌面に掲載した（表1の21）¹⁹。

『婦女界』は誌面自体も改めた。1922年1月号から口絵ページのあとの活版ページに「写真画報」という2から3ページのコーナーを設け、ニュースを写真とともに報じるようになった。ここに口絵に入りきれな



図4 不格好な姿勢で馬に乗る裕仁

かった皇族写真が多数収容されるのである。図4は、1921年11月の陸軍特別大演習の際、馬に乗ろうとする裕仁の写真である。『婦女界』1922年1月号に掲載された²⁰⁾。裕仁の不格好な一コマであり、従来の皇室写真とはかなり異なったスナップである。

『婦女界』のなかの良子像はこうした変化のなかに出現する。すなわち、女性の意識が変わり、マスメディアの力が向上するなかで、規制当局の考えも変わり、新しい女性皇族像としての良子が登場するのである。

2. 見せる／見せないのポリティクス

前節では、笑顔を見せる若い女性皇族の代表として良子像が出現する条件について検討した。それを受け、本節では、良子像が具体的にどのような政策過程、どのようなポリティクスのなかでマスメディアに出現するのかを見ていきたい。

良子が皇太子妃と「予定」されたと公表されるのは1918年1月である。しかし、この時点では「婚約」とはいえない。正式な婚約といえるのは、大正天皇の許可（勅許）があった1922年6月である。この4年5カ月の間に、写真の露出は少しずつ増えていく。本節が検討するのは、その間のポリティクス、とくに元老、宮内省と久邇宮家とのコンフリクトである。具体的には、良子に色覚障害が遺伝している可能性があることから始まった宮中某重大事件を見ていく²¹⁾。元老・山県有朋らが久邇宮家に「婚約」辞退を求めたが、「人倫論」すなわち天皇が一度下した決定を覆すことは倫理に反すると杉浦重剛らが「婚約」遂行の立場に立ち、山県と対立する事件である。結局、内務省および宮内省が結婚「予定」に変更がないと発表（1921年2月10日）し、問題は沈静化した。

なお、大正中期は、新聞の企業化が本格的となり、競争が激化していく時期である。また、写真および印刷技術が向上し、撮影した写真を当日中に紙面に組み込むことが可能になり、紙面がビジュアル化した。以前は紙面に写真を組み込むには時間がかかっていた。写真付きの皇室報道はこの技術革新から本格化するのである。

宮中某重大事件

朝日新聞社、読売新聞社のデータベースを検索すると、1918年1月

に結婚「予定」が報道されて以降、宮中某重大事件までの約3年間、マスメディアが良子の写真を撮影する機会は以下の5回だけときわめて少ない。

- ① 1918年4月4日 父の赴任地豊橋から帰京した際、東京駅で（家族と一緒に）
- ② 1918年5月26日 上野電気博覧会へ「御成」（家族と一緒に）
- ③ 1918年11月1日 青山練兵場でタンク（戦車）見学（他の皇族と一緒に）
- ④ 1920年6月20日 御茶ノ水の「時の展覧会」見学（家族と一緒に、写真は単独）
- ⑤ 1920年10月24日 明治神宮への参拝（他の皇族と一緒に）

取材陣が良子の姿を直接撮影できたのが、この5回だけであり、記者は直接にはなかなか動静を知ることができなかった。新聞は、家族や他の皇族と一緒に外出する機会を狙い、撮影を試みたのであった。

こうしたなかで宮中某重大事件が起きる。色覚障害の遺伝子を持つ可能性がある良子が皇太子妃となると、将来の皇嗣にも遺伝的影響が出てくる。それを避け、結婚を白紙に戻そうとする山県らの「純血論」と、あくまで「婚約」遂行を目指す「人倫論」の争いとなった。「人倫論」に立つ杉浦が、「婚約」破棄の動きに抗議して、裕仁の教育掛、すなわち東宮御学問所御用掛の辞表を提出したのは1920年12月4日である。そして久邇宮家も争いに巻き込まれることになった。久邇宮家属官であった武田健三が壮士的人物、^{くるはら}来原慶助に依頼し、怪文書「宮内省の横暴不逞」を作成、政界上層部や新聞社に送りつけたことはよく知られる（1921年1月24日）²²。内務省はこの日、良子の結婚に関する記事を禁止した。ところが、2日後の『読売』（1月26日）が杉浦の御用掛辞任を記事にしたことで事件が広く知られるようになり、騒ぎは大きくなった。

メディア工作

この間、杉浦に近い島弘尾と増島六一郎は、東京で発行される英字週刊誌『*The Far East*』（1921年1月22日号）に良子に関する記事を書かせることに成功した。このメディア工作について増島は、「〔元老は〕国内デハ威張り居ルモ、外国ヨリ言ハルレバ、忽チ青菜ニ塩ノ姿ナリ。ヨ

シ、我レ外国電話ヲ利用シテ彼等ニ痛撃ヲ与フベシ」と述べたという²³⁾。宮内省や元老を牽制するため、わざわざ英語メディアに良子の写真と記事を掲載させたのである。記事は、良子は、貞明皇后の選択であることをさりげなく強調する。だが、そのほかには良子が芸術に優れ、敬神の念が深い人物であることに触れる当たり障りのない内容である。しかし、騒ぎの最中、「婚約」遂行を前提にした英字記事が出ること自体、「婚約」破棄を目指す山県や宮内省への大きなプレッシャーになっただろう。

さらに、属官・武田の行動を見れば分かるとおおり、久邇宮家も明らかに反山県の立場から、「婚約」遂行の運動およびメディア工作に関わっていた。それがよく分かるのが『東京日日』（1921年2月3日）の記事である。良子は一度も宮家職員をとがめたことはなく、逆に慈悲深い言葉を掛けるエピソードを引き合いに、彼女の徳の高さをほめたたえる記事である。さらに、自筆の作文が、内容が判読できる程度の大きさで写真として掲載された。作文は「中江藤樹」と題され、江戸期のこの陽明学者のようにはなれないが、中江のように徳が高い人になるため「孜孜として勉むべきことを期す」とあった。『東京日日』は、未来の「国母」たる「御高風」が仰がれる内容だと紹介している。記事は「某近侍」の話とあるが、実際の情報源は、宮内省御用掛として良子に国語、修身、家政を教えていた教育主任・後閑菊野であった²⁴⁾。後閑は、良子こそ皇太子妃に相応しいことをアピールしたかったのだろう。そもそも、杉浦が事件について知ったのも、前年11月18日に後閑から相談を受けたからであった²⁵⁾。「婚約」遂行を願う後閑は、さまざまな情報を記者に漏らし、良子に関する記事を書かせた²⁶⁾。

表2は、1921年2月、東京主要紙に掲載された久邇宮家が情報源となった記事一覧である²⁷⁾。主に、後閑および宮家事務方トップ（宮務監督）の栗田直八郎が取材に応じていることが分かる。別例をあげれば、後閑は『時事』の記者に会って、良子は庭の田畑で農作業をし、収穫した米で父に粥を炊いたという美談を語っている（『時事』1921年2月11日、表2の3）。平民性や親孝行ぶりをアピールする内容である。また栗田は『東京朝日』に対し、良子は、訪欧前の裕仁と近く面会し、はなむけの品を贈ると漏らしている（『東京朝日』1921年2月24日夕刊、表2の10）。実際、面会は実現せず、贈り物も渡されなかったが、宮家内部では、カフスボタンの贈呈が検討されていた²⁸⁾。10記事中6つの

表2 1921年2月、久邇宮家が情報源となっている記事一覧

	日付	掲載紙	情報源	見出し	主な内容	良子の写真
1	3日	東京日日	某近侍 (後閑菊野)	東宮の御旅程を御研究遊ばさる	海図を見て渡欧する裕仁の航路の研究をしている(中江藤樹についての作文の写真も)	○
2	11日	東京朝日	不明	東宮御発程と共に御十八の御誕辰祝	良子は、渡欧の裕仁の旅の平安を祈るとともに体操やダンスなど健やかに過ごしている	○
3	11日	時事	後閑菊野	後庭に畑を作り百姓の御真似	農作業でつくった米で父に粥を料理するなど孝心の念が強い	○
4	12日	東京日日	不明	良子女王御自筆の目出度き雛の画	良子が杉浦重剛のために雛人形の絵を書き、桃の節句に贈る	
5	12日	国民	宮家職員大垣〔虎三〕	良子女王殿下昨今の御起居	和歌やピアノなど日々学問にいそしんでいる	○
6	13日	読売	栗田直八郎宮務監督	喜怒を現はし給はぬ久邇中将の宮	父・邦彦は宮相の辞職に心を痛めている。良子には事情を耳に入れていない	
7	14日夕	報知	宮家職員	久邇宮邸へ両三日来 伺候客遽に殖ゆ	良子は浮説に心痛めたかもしれないが、学問に精励している	
8	14日夕	国民	栗田直八郎	御痛心を慮られ一切を秘め玉ふ	父・邦彦は、勉強に障るのを配慮し、事件について何も良子に話していない	
9	23日夕	報知	後閑菊野	土佐絵の紙雛をお手づから良子女王殿下御日常	欠勤の先生に優しい言葉を掛けるなど良子は慈愛溢れている	○
10	24日夕	東京朝日	家扶 (栗田直八郎)	良子女王殿下東宮御見送り	良子は3月1日、裕仁と面会し惜別の言葉とはなむけの品を贈る	○

記事に良子の写真が付されており、事件を機に良子像がより広がっていくことが分かる。「婚約」を既成事実化したい久邇宮家は新聞記者にさまざまな良子情報を流していった。さらに裕仁が訪欧から帰国する際(1921年9月)にも、久邇宮家は新聞社、雑誌社に便宜を図り、メディアを味方することに熱心だった²⁹⁾。

久邇宮家と杉浦の周辺にいる人物は、活発なメディア工作を行い、結

果として、紙誌面には良子の写真とその婦徳に関する記事が掲載された。倉富勇三郎（帝室会計審査局長官、宗秩寮御用掛）は石原健三宮内次官に対し、後閑は良子情報を記者に漏らすので「困りたる人」だと話すと、石原は後閑だけではなく久邇宮家の職員は「総て困り者計り」だと返した³⁰。この時期、宮内省は久邇宮家にかなり手を焼き、ほとんど統制できていなかったのである。

牧野宮相の注意

宮中某重大事件は、内務省および宮内省が、結婚の「予定」を変更しないと発表し（1921年2月10日）、問題はひとまずは沈静化した。ところが、結婚の勅許（1922年6月20日）まで、さらに1年4カ月がかかる。事件後、宮内大臣（宮相）に就任した牧野伸顕は、結婚になお慎重な貞明皇后らを説得するため、勅許に時間をかけていたのである。首相の原敬も結婚には慎重であった。この間、久邇宮は、良子を貞明皇后に拝謁させたがっていたが、皇后からの返事はなかった。このため、久邇宮は非常に焦慮していた³¹。

事件のあと、1921年の年末までの良子の撮影機会を朝日新聞社、読売新聞社のデータベースで確認すると、

- ⑥ 1921年9月1日 箱根湯元から帰京した際、東京駅で（家族と一緒に、写真は単独）
- ⑦ 1921年12月4日 テニスのデビスカップに参戦中の清水善造選手らを招き宮邸で（家族と一緒に）

——の2回しかなく、依然として少ない³²。

牧野は、久邇宮に対し、結婚問題に関して宮家からは一切手を出さないように釘を刺していた³³。良子のメディア露出について、久邇宮は牧野の意見も聞き、ある程度忠告に従ったと見ていいだろう³⁴。

ところが、1922年4月以降の1カ月半だけを見ると、▽4月13日、神奈川県鶴見町（現在横浜市）の総持寺を参拝▽4月21日、代々木練兵場での野馬追実演を見学▽4月29日、東宮御所へ参殿▽5月9日、農商務省商品館でフランス美術展覧会見学——と急に良子の撮影機会が増えている³⁵。これは、この時期、結婚勅許が最終段階にあったことと関係があるだろう。牧野が久邇宮に対し、勅許の手続きをそろそろ進める話をした（3月17日）³⁶ あとに『読売』が憶測記事³⁷ を書く。近く

何らかの決定がなされることは報道記者に伝わっていた。久邇宮はこれまで、宮内省や貞明皇后を刺激しないよう自粛する気持ちでいたが、結婚勅許というギリギリのタイミングでまた動いてしまったということだろう。

そして結婚勅許の直前、波紋を広げる場面を新聞写真班に撮影させる。冒頭で取りあげた6月10日の幕張海岸での潮干狩りである。和服姿の良子が、裾をひざ下までたくりあげ海に入る図像であった。のち、倉富勇三郎が宗秩寮総裁の徳川頼倫に、こうした写真は貞明皇后の考えに合わないと語ると、徳川も自家の年配女性たちもだいぶ驚いていたと応じた。西園寺八郎・式部次長にいたっては「言語道断」と手厳しかった³⁸⁾。

牧野は結婚勅許の翌日(6月21日)、久邇宮に対し、新聞に記事や写真が出ることはできるだけ避けるようはっきりと注意した³⁹⁾。それまでの良子の一連の新聞写真、直接的には潮干狩りの写真への注意であろう。

良子洋行計画

牧野の「注意」のあと、良子を含む久邇宮一家の宮城・岩手旅行が中止になる出来事もあった。一家は1922年夏、長期にわたって那須塩原で静養していた。ここへ宮城県知事からの誘いがあり松島、平泉、鳴子温泉などを旅行することになった。日程は9月12日から7日間であり、地元では準備がほぼ終わっていた⁴⁰⁾。しかし、直前にこれを知った牧野は9月6日、国分三亥宮務監督⁴¹⁾を呼び、日程の短縮を求めた。国分が翌日、那須塩原に向かって久邇宮に話し、旅行自体の中止が決まった⁴²⁾。旅行が実行されれば新聞が良子を写真とともに報じることは確実である。牧野はこれを避けようとした。

また、1922年9月ごろから翌年2月にかけて、徳川宗秩寮総裁が中心となり外国の知見を広めるという趣旨で良子の洋行が検討された。牧野は断固反対だったが、徳川は元老・西園寺公望らの説得を試み、「之か為には職務を賭する」ほどの意気込みであった。酒巻芳男・宗秩寮庶務課長、二荒芳徳^{ふたらよし}・官房庶務課書記官ら宮内省改革派が支持していた。ところが、牧野は「此ことは何人より申来るも承知せず」と反対の意思を曲げず、計画は立ち消えとなってしまった⁴³⁾。

こうした経緯を折に触れ日記に記述していた倉富は「良子女王は成るべく御外出なされさる方宜しき様に思ふ。御外出なされは、新聞に写真

を出し仰山に書き立つることゝとなる」と改革派を批判していた⁴⁴⁾。牧野は、倉富とは違い、皇族の姿を人びとに見せる大切さは十分理解していた。だが、貞明皇后を刺激し縁談自体が破談になることを恐れ、良子写真の新聞への掲載を嫌った。これに対する徳川の反論は「大臣（牧野伸顕）は円満に御結婚の出来る様にとのみ考へ居り、御結婚後のことを考へ居らず」であった⁴⁵⁾。牧野が目先しか考えず、良子の視野を広げるという観点を持たないことへの批判である。

大衆社会状況と良子

本節は、宮中某重大事件と関連して、良子の婚約に変更なしという政策が決定される過程を見てきた。良子の新聞露出について、久邇宮家は宮中某重大事件、結婚勅許直前というギリギリの場面でカードとして利用した節があり、それによって新聞と世論を味方につけようとした。同じく「婚約」遂行運動に乗りだした杉浦周辺もメディア工作に関わっていた。これに対し、倉富のような保守派は、皇室の女性があまりに新聞に露出すること自体に批判的であり、牧野は「婚約」遂行という別の立場から久邇宮家を抑えようとした。こうした諸力のせめぎあいのなかで、結果として良子の情報や図像はメディア空間に流通し、人びとがそれを見る機会が増えていく。

この節はこうしたポリティクスのなかの各アクターの動きを検討したが、はじめに述べたように、政策決定過程自体を重要視しているわけではない。あるいは、久邇宮という特異なアクターに事件を還元させようとしているわけでもない。

従来、皇太子妃決定という天皇家内部の決めごとに、宮内省、あるいは元老以外のアクターが容喙することはあり得なかった。ところが、良子の「婚約」には、久邇宮家、杉浦周辺、マスメディアという天皇家外部のアクターがコンフリクトに直接、間接に参与する。そして問題は、「国民の府」である衆議院内に飛び火することで、山県が描いた「婚約」破棄のシナリオは崩れていく。大衆社会を「大衆が、社会の主導的地位に立つ状況」⁴⁶⁾と考えると、逆から見た大衆社会とは、支配エリートだけが社会状況を統制することができなくなった社会だといえる。良子「婚約」をめぐる政治状況はまさに大衆社会が本格化した時代の現象であった。

3. 中四国・九州・関西旅行と民衆

前節で述べた、見せる／見せないのポリティクスのなかで、良子の図像が流通していくが、これが飛躍的に増える契機が、1923年に実施された久邇宮家の中四国・九州・関西への旅行である。訪問先の地方紙が良子を歓迎する大報道を行い、さらに、娯楽メディアとしての活動写真が動く映像として、絵葉書メディアが色鮮やかな図像として、良子イメージを民衆が受容しやすい形で増幅していった。この旅行は1923年5月4日、東京を出発し、三重・奈良・京都・香川・岡山・福岡・熊本・鹿児島・宮崎・大分・山口・広島・大阪・兵庫の14府県を巡り、6月5日に帰京した33日間の大旅行である＝表3。同行者は父・久邇宮、母・侁子妃、妹・信子女王で、旅行距離は2000マイル（約3200キロメートル）ともいわれる⁴⁷⁾。かなりのち、良子は、人生で楽しかった思い出の筆頭に「大正十二年春の九州旅行」をあげており⁴⁸⁾、良子にとって大きな経験であったが、これまで出版された伝記にはわずかしかりあげられていない⁴⁹⁾。

良子一行が訪問する県、とくに九州各県では、新聞の旅行に対する注目度は極めて高かった＝図5（良子を迎える日の福岡市の『九州日報』）。



図5 久邇宮家を迎える日(5月14日)
の『九州日報』(福岡市)の紙面

大分市の尋常小学校6年生の作文には「今頃はどこへお出でだとか、明日はどこへお成だとか、色々な御事は皆新聞で手に取る様にかゝはれます」と書かれている（『大分新聞』5月21日夕刊）。いったい旅行先の人びとは良子をどのように見ようとしていたのだろうか。当時の地方紙を中心に分析しながら、良子像がどう受容されたかについて検討していきたい。

活動写真

この旅行で特記すべきは、全行程

表3 久邇宮家の中四国・九州・関西旅行（1923年）の日程

日付	宿泊地	主な日程
5月4日	三重・宇治山田	東京駅発山田駅着。神宮祭主官舎宿泊
5月5日	〃	神宮参拝。同上宿泊
5月6日	京都	山田駅発奈良駅着。畝傍陵参拝など。奈良駅発京都駅着。京都久邇宮邸宿泊
5月7日	〃	桃山御陵など参拝。同上宿泊
5月8日	香川・高松	京都駅発高松港着。松平別邸披雲閣宿泊
5月9日	〃	小豆島訪問など。同上宿泊
5月10日	〃	船で鯛網漁場見学。同上宿泊
5月11日	〃	屋島登山。高松駅発琴平駅着。金刀比羅宮参拝。丸亀駅発高松駅着。同上宿泊
5月12日	京都	高松港発岡山駅着。後楽園見学。岡山駅発京都駅着。京都久邇宮邸宿泊
5月13日	船中	京都駅発神戸駅着。神戸港から船に乗船。船中泊
5月14日	福岡	門司港着。八幡製鉄所見学。八幡駅発東郷駅着。宗像神社参拝。東郷駅発博多駅着。黒田別邸宿泊
5月15日	〃	九州大学見学、大宰府天満宮参拝、商品陳列所で買い物など。同上宿泊
5月16日	熊本	博多駅発久留米駅着。久留米師団など見学。久留米駅発熊本駅着。水前寺庭園散策など。細川邸宿泊
5月17日	鹿児島	熊本駅発鹿児島駅着。島津別邸（磯邸）宿泊
5月18日	〃	照国神社参拝など。同上宿泊
5月19日	〃	桜島訪問。山形屋で買い物。同上宿泊
5月20日	宮崎	鹿児島駅発高原駅着。狭間神社参拝。高原駅発都城駅着。島津荘見学。都城駅発宮崎駅着。旅館黎明館宿泊
5月21日	大分・別府	宮崎神宮参拝。青島見学。宮崎駅発別府駅着。和田邸宿泊
5月22日	〃	温泉巡り。同上宿泊
5月23日	〃	別府滞在。同上宿泊
5月24日	山口・下関	別府駅発宇佐駅着。宇佐八幡神宮参拝。宇佐駅発下関駅着。春帆楼宿泊
5月25日	広島・宮島	下関駅発宮島駅着。旅館岩惣宿泊
5月26日	京都	宮島駅発京都駅着。京都久邇宮邸宿泊
5月27日	〃	京都駅発大阪駅着。中山太陽堂、大阪毎日新聞社、大阪朝日新聞社など見学。大阪駅発京都駅着。同上宿泊
5月28日	〃	京都滞在。同上宿泊
5月29日	〃	京都駅発神戸駅着。北白川宮成久王の遺骸を迎える。神戸駅発京都駅着。同上宿泊
5月30日	〃	京都帝室博物館見学など。同上宿泊
5月31日	奈良	京都駅発奈良駅着。平城京跡見学など。奈良ホテル宿泊
6月1日	〃	東大寺参拝。奈良公会堂前で鹿に餌やり。同上宿泊
6月2日	奈良・吉野	奈良駅発吉野駅着。旅館辰巳屋宿泊
6月3日	京都	吉野滞在。吉野駅発京都駅着。京都久邇宮邸宿泊
6月4日	〃	京都府立植物園見学。同上宿泊
6月5日	—	京都駅発東京駅着。久邇宮邸帰着



図6 旅行の前にテニスをする良子

が活動写真として撮影され、広く公開されたことである。中心になったのは大阪毎日新聞社と婦女界社であった。大阪毎日新聞社の場合、「良子の動静を撮影せよ」と宮家から下命を受けて、記録としての撮影が公認されていた⁵⁰⁾。婦女界社も、久邇宮家に食い込んで取材をしていたことから、撮影において特別な配慮がなされた。この両社のほか、大阪朝日新聞社、さらに山陽新報社、神戸新聞社などの地方紙、くわえて活動写真会社も撮影していたことが確認される。だが、大阪毎日新聞社

と婦女界社だけが、ほぼ全行程に同行するなど規模において他社を凌駕していた。

大阪毎日新聞社と婦女界社の活動写真班は、旅行に先立つ1923年4月下旬の3日間、宮邸で撮影を許可された。ピアノの練習や妹宮との合唱、さらにはビリヤードやテニスなどの場면을撮影した。図6は、『婦女界』1923年7月号で紹介されたテニスを楽しんでいる活動写真の2コマである(4月30日)。そのうえで、両社は、旅行先で撮影の機を得た。図3も下関駅出発後、山口県内を通過中、食堂車にいる良子を撮影した活動写真の1コマであった(5月25日)。神社参拝、施設見学のような固い場面ばかりでなく、くつろいだ場面の笑顔の撮影を許されていたことが分かる。

さらに、注目すべきは、大阪毎日新聞社の即夜公開であった。事前に撮りためた分と当日の撮影分を併せて訪問先で上映する公開方式である。5月10日の高松を皮切りに始まった。ここでは、九州地方での上映を見てみる。一行が九州を回ったのは5月14日から24日までであるが、▽14日門司市▽15日福岡市▽16日久留米市▽17日熊本市▽18日鹿児島市▽20日宮崎町▽22日別府町▽23日大分市▽24日宇佐町と、原則的に滞在した町で上映していった(『西部毎日』5月13日、15日)。たとえば、熊本市の会場には1万5000人が集まり「人気は湧き返るば

かり」であった。旅行の様子が順番に紹介され、熊本に到着したシーンになると、観客たちは、「昨日今日目の前^{あたり}拝し奉た光景」を感慨深く見つめ、最後に万歳を三唱して散会したという（『西部毎日』5月18日）。翌日の鹿児島市でも、午後2時までの動静を午後7時半の上映開始に間に合わせ、観客たちはその迅速さに「驚嘆」したと、『西部毎日』（5月19日）は伝えている。上映場所は照国神社の境内で、5万人が集まったという。大阪毎日新聞社は5班の映写隊を編成し、旅行後も上映を続けた⁵¹⁾。

婦女界社の場合、大阪毎日新聞社の即日公開に比べ迅速さには欠けたが、地方での映写に力を入れたことがうかがえる。6月17日、都内での公開を皮切りに、各地で上映した⁵²⁾。7月8日、富山市でこれを見た女性は「満員の場内は水を打つた様な静けさ……ご旅行沿道の美しい景色……を背景に、静々と歩を移させ給ふ宮様方のお姿が、側近く、ありありとお映り遊ばず場面には、北陸の一隅に居ながら、拝観^{ママ}さして戴いた事を、心から感謝致します」と感激している⁵³⁾。

皇族の活動写真が大規模に公開され、大衆的な人気を博する例は、1921年の裕仁皇太子の訪欧の例がある⁵⁴⁾。また、即夜公開は1922年3月の貞明皇后の九州訪問の際も行われた。ただ、良子女王の場合、若い女性皇族が屈託のない笑顔を見せてスクリーンに映るという新しい要素が加わり、皇室人気に新しい局面を開いた。

メディアとしての絵葉書

この旅行を視覚として伝えたのは、新聞写真であり、活動写真であり、『良子女王御巡遊画報』⁵⁵⁾のような画報であった。だが、もう一つ忘れてはならないのは、絵葉書というメディアである。新聞は速報することにおいて先んじており、活動写真はさらにこれを映像として伝えた。無声映画の時代であり、弁士や説明者の話で、映像はさらに興味深い物語として仕立てられていただろう。しかし、いずれにしてもモノクロである。これを色刷り（カラー）で伝えたのが絵葉書であった。

この旅行中の良子を描いた絵葉書は数多い。図7は神戸から門司に向かう船中（5月13日）で、輪投げに興じる良子を模写した絵葉書である。図8は奈良市内の公会堂前で鹿と戯れる場面（6月1日）、図9は京都府立植物園でイチゴ摘みをするところ（6月4日）である。ここでも笑



下殿玉女子員の中日遊藝會

図7 船のなかで輪投げに興じる良子



下殿玉女子員
ワケのハナ、鹿が飼育場

図8 奈良で鹿に餌をやり喜ぶ良子



下殿玉女子員 京都に在り
ふじのふ

図9 京都府立植物園でイチゴを摘む良子

顔が印象的だ。それぞれの絵葉書は、もとなる新聞写真があり、絵葉書販売会社は、新聞写真をおそらく無断で模写したものであろう。新聞写真で表現できない色彩や表情を写實的に描いている。中四国・九州・関西旅行を題材にした絵葉書は御成婚記念として大量に複製された。なかには、「お召になつた〔こ〕ともないお服装」を着たものや「敬意を失した」ものまで出回り、久邇宮家が取締を要請したこともある（『東京朝日』1923年12月13日）。

筆者は、古書店を通じて、結婚までの良子女王が描かれた絵葉書をできるだけ収集してみた。良子が撮影されている絵葉書が計27種収集できた。内訳は中四国・九州・関西旅行以前のもものが4種、旅行関係が8種、旅行以後のもものが6種、肖像その他が9種であった。旅行以前のスナップ的な凶像は、冒頭で触れた1922年6月の潮干狩りの写真と、1922年8月の那須塩原での静養中のものしか確認できなかった。ここからも中四国・九州・中国旅行は、良子像を劇的に増やしていったことが分かる。

なお、収集した絵葉書のうちに「敬意を失した」ものがあるとは断定できなかった。だが、図1、2における裾の表現、具体的には肌着（裾よけだろうか）がのぞいているところは注目され、これが「敬意を失した」ものかもしれない。いずれにしてもこうした細かい表現が娯楽として楽しむ要素になっていたと思われる。

宮家のメディア対応

前述したとおり、牧野宮相は、良子の旅行を好んでいなかった。これに対し、久邇宮家では、この旅行において機会があれば良子を露出させる方針をとる。1923年4月7日、久邇宮家付事務官、野村礼讓から訪問先各県知事に宛てた文書によると、活動写真や一般写真を願ひ出る者に対して「当方ニ於テ之ヲ制限シ又ハ取締ルコト行ハレ難」いため、取扱は各地方官庁に一任することを伝えた。「前途ヲ遮」るなど不敬な撮影でなく、指示された時間と場所に従うならば、撮影の自由を認めてもよいとの指示である⁵⁶⁾。

これを受け、たとえば、福岡県では写真班にかなりの自由を認めた。たとえば、八幡製鉄所の見学（5月14日）の際、構内で自由に撮影させた（『西部毎日』1923年5月15日）。また、宮崎県の青島（5月21

日)では、一家は、写真班が海岸の砂上に線を引いた場所に申し出のままに立ち、ごく至近距離からの撮影を認めた(『大分新聞』5月23日夕刊)。前例では6間(約11メートル)の距離をおいて撮影することになっていた(『豊州新聞』5月19日)。

良子自身もカメラを強く意識し、サービスすることが多かった。5月14日、門司港に到着した際、良子は、兄・朝融王^{あさあきら}⁵⁷⁾と並んで棧橋に立ち、カメラに顔を向けポーズをとった。「大変御親みの籠つた御目ざしで、態々^{わざわざ}レンズの方へ御顔」を向けた(『西部毎日』5月15日)。良子のカメラへの対応は各地で見られるものである。

久邇宮家は、沿道の人びとにサービスすることも忘れなかった。自動車で移動の際には奉迎の民衆のために徐行することが常であった。下関市で宿泊の夜(5月24日)、久邇宮家宮務監督の国分は、市長に対し「市民は良子女王殿下を容易に拝観し得たらうか」と訊ねたうえで、良子は自動車の右側に座っているとの情報をわざわざ伝えた。良子を見るには、右側の席を見よとのアドバイスで、市長がこれを記者に話して記事で紹介された(『馬関毎日新聞』5月25日)。

また、岡山県宇野港では、四国からの船に同船していた『大阪朝日』『大阪毎日』『大阪時事』『四国民報』の記者が棧橋に並ばされ、久邇宮から「毎日御苦勞であつた」と声を掛けられ、良子からも会釈を受けた(『大阪毎日』5月12日夕刊、『大阪時事』5月13日夕刊)。宮家は報道に配慮し、記者と挨拶を交わすほど良好な関係にあった。

発言と行動への注目

それでは新聞は実際、どのような報道をしていたのだろうか。久邇宮家と取材陣が協力関係を築いていたとしても、良子と直接、会話を交わすことはできなかった。そこで、記者は、良子と直接、接した人から取材して若い女性らしいはしゃいだ様子の肉声や行動を報道していく。

それはたとえば、香川県で鯛網漁場を見学した際、トビウオが跳ねるのを見て「お魚がお魚が」と喜ぶ姿であり(『大阪時事』5月12日)、瀬戸内海を進む船内でデッキゴルフに興じていたところ、兄・朝融が玉を船外、つまり海に飛ばしてしまったとき、「お兄いさまア……」と甘い声を出す姿(『馬関毎日新聞』5月15日夕刊)であった。福岡県の商品陳列所で、知事が、「沢山御買上げ下さいお安く致しますから」と

冗談をいうと、良子は笑い出し、二宮金次郎が薪を背負って本を読む1円80銭の博多人形を土産に買った（『福岡日日新聞』『西部毎日』5月16日）。鹿児島市のデパートストア山形屋ではアイスクリームを食し、ココアやサイダーを飲んだ（『鹿児島新聞』5月20日）。訪問後、「買上の光栄」を得た商店や製造元は「久邇宮一家買上」の広告を新聞に掲載するなど、良子は消費の模範にもなっていた。当時、婦人雑誌の広告欄の常連であったクラブ化粧品の中山太陽堂の工場（大阪市）も訪れ、化粧品の製造過程を見学した（5月27日）⁵⁸。訪問場所は自治体を選定するものだが、良子が興味を持ち、なおかつ、若い女性が共感できそうな場所を選んでいるのである。

写真が趣味であった良子は、自分が撮影するための写真機を1台携行しており、実際に撮影する姿がしばしば記事や写真になっている。「現像から焼付や引延ばしまで」することが紹介され（『福岡日日新聞』5月13日夕刊）、桜島で溶岩をしゃがんで撮影したという記事（『九州日日新聞』5月20日）も見える。鹿児島での宿舎で給仕役を務めた2人の若い女性の写真を新聞社からもらうと、「鹿児島新聞の写真班で写したの？ マア！ 良く出来てるのね」と微笑み、自分でも撮影しようと女性を呼んだ。「あたしの写真器は毀れたから信子さんの^{ママ}を使ひませう」といってピントを合わせたという（『鹿児島新聞』5月21日）。

久邇宮家について、新聞は「到る処の御平民振り」（『九州新聞』5月16日）、「各宮殿下の御平民的なのに驚く」（『宮崎新聞』5月23日）など「平民」を強調した。旅行に同行する宮家職員や、訪問先の説明者は、取材記者に対し、良子のさまざまな発言や行動を紹介し、それが細かく報道された。そうした一つひとつのエピソードが、「平民的」であることの担保となったのである。

服装への注目も高かった。「今日はパツと眼の醒めるやうな水色に同じ色の刺繍で菊花御紋章を散らした清々しい御洋服に御召替へになり御帽子も純白の桃色のリボンの附いたのと変り黒字に鳥の模様を金糸で縫潰した手提袋をお提になり其の右の御手首に嵌めさせられた細い黄金の腕輪と左の御手首に小さい御時計とがキラキラと輝く」（『西部毎日』5月16日）などとファッションの細かい描写もなされた。良子はたいがい帽子をかぶったドレス姿であり、これは読者には見慣れた姿であった。新聞が「良子女王は例の御洋装」と見出しをとるほどだった（『福岡日

日新聞』5月16日)。

ソフトな警備

こうして表象された良子を見ようとした人びとの歓迎ぶりはすさまじく、福岡市では訪問初日、沿道に10万人以上が並んだとされ、それより規模の小さい久留米市でも沿道に15万人が並んだ(『福岡日日新聞』5月14日、17日夕刊)。香川県訪問の4日目、屋島訪問に出かける一行を朝から待っていた奉迎者たちは、大雨で訪問が中止になったことが伝わり、良子を見ることができない驚きから「失色の態」であった。ところが一転して1時間遅れで出発となると、今度は「狂せんばかりに歓喜」したという(『香川新報』5月12日夕刊)。

沿道での歓迎に対し、警察当局は「嚴重なる警戒はせ^{ママ}ない積りである」(『九州日報』5月13日)、「物々しき警戒を避け」る(『大阪毎日』奈良号5月24日)と、ソフトな警備を強調していた。

金刀比羅宮参拝のため高松から琴平に向かう途中、讃予線(現予讃線)鴨川駅で、乗車の列車が停車した(5月11日)。単線のため行き違いの交換駅であり、満員の上り列車の乗客は、窓から顔を出して「殿下の姿は那邊」と御召列車を見わたした。以前なら不敬となるこうした行為を許すことが「民情に近づく」には大切とする久邇宮の考えから、規制はまったく行われなかった(『香川新報』5月12日)。

『関門日日新聞』(5月26日夕刊)は各県の対応についてつぎのように評価している。「気持よく思つたのは、御旅行中御警戒の任に当つた各県の当局が、比較的時勢を理解して殿下の御趣旨を奉じ、寛大な処置を採つた事である。……勿論、これは下情に通じさせられ玉ひ万事平民的におはす、大宮殿下〔久邇宮〕の御沙汰に依るものであらうが、我々は……当局に一言の謝辞を惜まない」。緩やかな警備や報道陣への好待遇は新聞からの評価が高かった。

一方で、警戒への批判も存在した。たとえば『西部毎日』(5月18日)のコラムには「山口県では又大変な警戒を遣るらしい▲廿四日に御来着になるといふのに十七日から警察を繰り出して騒いでゐる▲御警戒も無論必要だが必要以上の警戒はムシロ不敬に亘ると云はれても弁解の辞はあるまい」とある。『大分新聞』も、遠くから奉迎のため徒歩で通過駅にやってきた人びとを駅の外に立たせるなど厳しい警戒措置をつぎのよ

うに批判している。

〔旅行の〕目的が各地の民草と温かい心を交はされて、国民と皇室の融和を図るといふこと〔ならば〕……其筋では進んで各県民と殿下方との接触を計つて遣るべきであつ〔た。〕……此度が大分県当局が採つた処置といふものは……我々の熱誠さを押へ付ける様なものである（『大分新聞』5月23日夕刊）。

ここで強調したいのは、警備、警戒の厳しさ自体ではない。むしろ、皇室と民衆を隔てる措置が批判され、皇室と民衆のフラットな関係性が理想とされていることである。「菊のカーテン」という言葉ができるのは戦後のことだが、菊のカーテン批判と同じ構図だといえよう。良子の地方旅行は、皇室を民衆に近づけるひとつの機会であると捉えられており、それを妨げる措置が公然と批判できたのである。

旅行の決定

ところで、牧野宮相、あるいは、倉富のような宮中保守派が、良子をメディアにさらすことを喜んでいなかったにもかかわらず、長期旅行がなぜ実施できたのだろうか。

もともと、同仁会香川支部の発会式に、総裁として久邇宮が夫妻で出席することが予定されていたが⁵⁹⁾、旧高松藩主松平家当主、頼寿（貴族院議員）が良子の同行を強く希望した。久邇宮もそれまで船に乗ったことがなかった良子を、下関まで船に乗せ、瀬戸内海や宮島を見学させたいという願いがあり⁶⁰⁾、もっと広くいえば、皇太子妃となる前に実際の社会に触れさせたいとの希望があった。牧野も、久邇宮の親心や貴族院議員の意向を無視するわけにはいかなかった。

また関屋貞三郎宮内次官は、松平が大げさな準備をしていることや、良子が現在の立場では公の席に出席できないことを懸念し、牧野が直接、宮務監督の国分に話をするよう勧めていた⁶¹⁾。旅行に慎重な態度を示しているように見えるが、関屋は実は良子の母・侘子の実家・島津家のある鹿児島まで足を伸ばすように勧め⁶²⁾、旅行の実現をあと押ししている。この旅行については宮内省内で慎重・推進の2つの考え方があり、洋行が断念された直後、なし崩し的に決定されたともいえる。

もう一つ指摘すべきは、ひとたび旅行予定が地元伝わると「わが県へも」「わが町にも」との要請が相次ぎ、旅程が長くなったことであろう。たとえば、山口県は3月下旬、九州への往復の途中に下関に立ち寄るように願い出て、1泊することが決まった⁶³⁾。宮崎県への訪問計画は当初はなかったため知事が上京して宮崎への立ち寄りを願い出て、こちらも1泊することになった（『日州新聞』3月24日夕刊）。さらに、同県では都城が島津家ゆかりの地であったため、町出身の上原勇作前参謀総長が間に入り立ち寄りが決まった（『大阪朝日』九州版5月8日）。地方には、良子訪問への期待があり、それがだんだんと膨らんだということだろう。

ローカルからナショナルへ

下関市宿泊の夜（5月24日）、関門海峡をのぞむ春帆樓に宿をとる久邇宮一家を楽しませようと大阪毎日新聞社関門支局は海峡をサーチライトで照らし、地元青年団による提灯行列、提灯船とあいまって光のページェントをなした（『西部毎日』5月25日）。一家の訪問をメディアが盛りあげ、それを活動写真で上映した。旅行はメディアイベントでもあり、メディアが歓迎ムードを盛りあげた面は否めない。

ただ、民衆からの要望で、当局の対応が変わった例もある。山口県内の列車での移動の際、途中駅では町村長と助役以下、同仁会特別会員、日赤特別社員、愛国婦人会有功章佩用者など限られた有資格者だけが構内で奉迎できることになっていた。ところが、県東部の都濃郡では、児童生徒、青年団員、処女会員など「規律アル団体」員は同じように駅構内で奉迎してほしいとの申し出が町村からあがり、その旨、県に上申した。そこで県は、児童生徒には適当な場所で奉迎させることや、婦人団体にも便宜を図るように方針を改めた。良子を奉迎したい、あるいは単純に良子を見たいという民衆の要望に県が方針を変えた形である⁶⁴⁾。

他府県でも同様に、良子を見ようと訪問地、通過地には多くの人が集まった。有資格者や児童生徒以外が、当局の動員という枠を超えて集まらなければ、万単位の間人が集まることはないだろう。それでも、直接見ることができなかった人は、活動写真を事後的に見て、奉迎を追体験しようとした。さらに、良子の姿はさまざまな複製メディアによって全国に広がっていく。訪問先の人びとによるローカルな体験は、ナシヨナ

ルなレベルでの良子像受容へとつらなっていく。それは、カメラや記者の前でも物怖じしない、惜しげもなく笑顔を見せる新しい女性皇族としての良子像であった。

おわりに

良子は潮干狩りでは着物の裾をたくり、また、テニスを楽しみ、ピアノの伴奏にあわせソプラノの美声を披露する、スポーツと音楽が好きな活発な女性として描かれた。良子像の登場は、新中間層の若い女性が、新しい生き方を模索し始める時代に連動していた。そうした社会の変容とともに、内務省も皇室の写真を積極的に撮影させる方針に改め、良子の写真も大きく増えていく。宮中某重大事件に伴い、良子の「婚約」をめぐる宮中内外のアクターが政策をめぐる力を競い、宮中の出来事といえども、元老と宮内省だけでは決定できない状況が出現した。こうしたなかで増えていった良子像を人びとは活動写真や絵葉書を通じて娯楽として楽しみ、人気を博した良子を地方旅行において最大限に歓迎した。

裕仁と良子の結婚はその後、生活改善運動との関連で、民衆の理想となっていく。生活改善運動とは、衣食住や結婚式をはじめとする社交儀礼の合理化を目指した文部省主導の社会改良運動である。女官が宮中に住み込み、後宮につながりやすい局制度が廃止され、裕仁と良子は宮中における一夫一婦制を確実なものにした。洋風の住まいを始めた2人は、文化生活への人びとの憧れとなるのである。『婦女界』では、国民教化について発言をつづけていた加藤咄堂とつどうが「今こゝに皇太子殿下の良子女王との御成婚となつて、名実共に一夫一婦の範を国民に示したまふに至つたので、此の意味に於ても、慶賀一段の深きを致すべき理由ありと思ふ」と述べている⁶⁵⁾。局制度の廃止は、未婚女性ばかりの女官制度を大幅に改編するものであり、一夫一婦制と絡めて語られていたのである。

結婚後、2人はその「仲睦まじさ」が、報じられるようになる。「恋愛」という言葉が直接的に使われることはなかったが、夫婦中心、子供中心の家庭を築く姿はその後も婦人雑誌を通じて人びとに提供されていった(図10、『主婦之友』1933年1月号附録)⁶⁶⁾。

こうした現象が、戦後の正田美智子ブームと地つづきであることは明



図10 『主婦之友』1933年1月号附録「皇室の御繁栄」

らかであろう。1924年1月26日の「御成婚」当日、裕仁と良子を祝うために東京市内の沿道に集まった人出は50万人とも60万人ともいわれる。単純比較はできないが、美智子妃のときに匹敵する数字とっていい⁶⁷⁾。

ただし、良子の新しい女性皇族像には限界

もあった。宮中某重大事件における良子を見れば分かるように、彼女は父の決定に従う女性、自らの意見を表明することはない女性であると表出された。正田美智子のように、自らの意見をはっきり述べるさまは報道されなかったし、そもそも無声映画の時代に、また、ラジオもまだない時に彼女の肉声を人びとが聞く機会もなかった。

良子像は、新しさと古さを、モダニズムと保守性を、併せ持っていたがゆえに、より新しい像が出現すると、急速に陳腐化する。実際、裕仁の弟宮、秩父宮が松平節子（のちの勢津子）と結婚することが発表される（1928年1月）と、節子はより「平民」的な人物としてメディアに登場し、良子の存在感は低下していく。図10のような図像が婦人雑誌の新年号に掲載されることはあるものの、その後の良子は出産と子育てという母としての役目に追われ、新聞・雑誌への登場回数は減少していくのである。

注

伊藤隆・広瀬順晴編『牧野伸顕日記』（中央公論社、1990年）、倉富勇三郎日記研究会編『倉富勇三郎日記』2、3巻（国書刊行会、2012年・2015年）、原奎一郎編『原敬日記』9巻（乾元社、1950年）は、それぞれ『牧野日記』『倉富日記』『原日記』と略記して、日記の日付を付した。また、頻出する以下の新聞は、括弧のなかの表記を略記し、日付を付した。『東京朝日新聞』（東京朝日）、『大阪朝日新聞』（大阪朝日）、『東京日日新聞』（東京日日）、『大阪毎日新聞』（大阪毎日）、『大阪毎日新聞九州附録 西部毎日』（西部毎日）、

『時事新報』（時事）、『大阪時事新報』（大阪時事）、『報知新聞』（報知）、『国民新聞』（国民）、『読売新聞』（読売）。

- 1) 石田裕規「戦前期『大衆天皇制』の形成過程」『ソシオロジ』47巻2号（2002年）37-53頁。同「マスメディアの中の帝室」京都大学大学院提出博士論文、2006年。
- 2) 松下圭一「大衆天皇制論」『中央公論』1959年4月号、30-47頁。
- 3) 若桑みどり『皇后の肖像』（筑摩書房、2001年）。
- 4) 同上244頁。
- 5) 伊藤之雄『昭和天皇と立憲君主制の崩壊』（名古屋大学出版会、2005年）。
- 6) 社史編纂委員会編『講談社の歩んだ五十年 明治大正編』（講談社、1959年）609頁。
- 7) 都河龍「本誌が今日を築くまでの十年間」『婦女界』1923年1月号、4-5頁。
- 8) 南博編『大正文化』（勁草書房、1965年）184-185頁。前田愛『近代読者の成立』（有精堂出版、1973年）173頁。
- 9) 前田前掲書175頁。
- 10) 同上176頁。
- 11) 木村涼子『〈主婦〉の誕生』（吉川弘文館、2010年）67-69頁。
- 12) 『婦女界』1918年10月号目次には北白川宮妃房子内親王の肖像の口絵が掲載とされているが、所蔵が確認された石川武美記念図書館の本は落丁のためこの口絵が確認できなかった。
- 13) 表1の27から31までは、いずれも活動写真を一般の写真のように紹介したもので、1ページに複製のショットを掲載している場合もあるが、計算としては1ページを1枚と数えた。
- 14) 坂本の分析によると、『婦人世界』冒頭口絵の皇族妃は1907年から1911年までがのべ27人、1912年から1917年までがのべ19人、1917年から1921年までがのべ3人と減少していく。坂本佳鶴恵「戦前期女性雑誌における口絵写真の分析」『人文科学研究』10号（2014年）97-109頁。
- 15) たとえば、野村礼讓「良子女王殿下の御昨今」『婦女界』1924年1月号、7頁。
- 16) 南編前掲書231頁。
- 17) 楠谷遼「マスメディアにおける天皇・皇族写真」河西秀哉編『戦後史のなかの象徴天皇制』（吉田書店、2013年）171-201頁。坂本一登「新しい皇室像を求めて」近代日本研究会編『年報・近代日本研究20 宮中・皇室と政治』（山川出版社、1998年）22-23頁。伊藤前掲書406-409頁。小山亮「一九二一年裕仁皇太子外遊と視覚メディア」『人民の歴史学』198号（2013年）16-31頁。
- 18) 「鹵簿撮影其の他の件依命通牒」内務省警保局（内務大臣決裁書類・大

正 10 年) 国立公文書館所蔵 (アジア歴史資料センター A05032516300)。

- 19) 「東宮殿下の御帰朝に際し久邇宮家を箱根にお訪ねして得た良子女王殿下の御近況」『婦女界』1921 年 10 月号、2-19 頁、および口絵。
- 20) 同じ写真は『東京日日』1921 年 11 月 22 日に掲載されている。『婦女界』が何らかの形で同紙から入手したと考えられる。なお、図 4 は、画像がよりはっきりしている『東京日日』から撮影した。
- 21) 宮中某重大事件については以下を参照した。猪狩史山「申西回瀾録」(国立国会図書館憲政資料室所蔵、憲政資料室収集文書 1123)。「申西回瀾録」は杉浦の側近だった猪狩が 1921 年春にまとめ、のちに加筆訂正していった杉浦側の記録である。伊藤之雄「原敬内閣と立憲君主制 (2)」『法学論叢』143 巻 5 号 (1998 年) 1-33 頁。浅見雅男『關ノ皇族』(角川書店、2005 年)。黒沢文貴『大戦間期の宮中と政治家』(みすず書房、2013 年) 20-90 頁。
- 22) 全文は、前掲「申西回瀾録」の最後に掲載されている。また、当時の謄写刷は、山口県文書館に所蔵されている (田中義一文書 1614)。
- 23) 前掲「申西回瀾録」。増島は、英吉利法律学校 (現・中央大学) の初代校長として有名だが、杉浦の盟友でもあった。英国留学経験による英語力もあり、英字誌への工作に乗り出したのだろう。
- 24) 『倉富日記』1921 年 2 月 25 日条。倉富は、後閑の名前だけをあげているが、実際は、杉浦周辺との共同工作だった可能性もある。もともと、この作文は、久邇宮家が杉浦に見せ (1921 年 1 月 19 日)、杉浦が「識見ノ卓越セル、文章ノ齊整ナル、嘆美スベシ」と述べたものであったためである (前掲「申西回瀾録」)。杉浦の周辺が、久邇宮家に新聞への漏洩を促したのではないだろうか。「申西回瀾録」は、事件が政治問題化しないように杉浦が細心の注意を払っていたと強調する。しかし、それはあとの弁明であり、『*The Far East*』誌への記事掲載を見ても、実際にはメディア工作に関わっていたと見るのが妥当である。
- 25) 前掲「申西回瀾録」。渡辺克夫「宮中某重大事件の全貌」『THIS IS 読売』1993 年 4 月号、73 頁。
- 26) 事件の最中の 1921 年 2 月 11 日、下田歌子が首相の原敬を訪ね、事件を大きくしたのは「婦人に在りては後閑菊野と云ふ人、其宣伝に努めたるは大に力ありしが如し」と語った。『原日記』1921 年 2 月 11 日条。
- 27) 『東京朝日』『東京日日』『時事』『国民』『報知』『読売』のほか『萬朝報』『都新聞』『中外商業新報』『二六新報』『中央新聞』『やまと新聞』『東京毎日新聞』を調査対象とした。
- 28) 『倉富日記』1921 年 2 月 25 日条。
- 29) 伊藤前掲論文 32 頁。
- 30) 『倉富日記』1921 年 3 月 4 日条。

- 31) 同上 1922 年 2 月 10 日条。『原日記』1921 年 7 月 10 日条。
- 32) ただし、東京の新聞には掲載されていないが 1921 年 10 月下旬の関西旅行の際、以下の 2 カ所で写真撮影の機会があった（『大阪朝日』『大阪毎日』1921 年 10 月 20 日夕刊、『京都日出新聞』10 月 25 日）。
- ▽ 1921 年 10 月 19 日、大阪見学の際、大阪城で（家族と一緒に）
- ▽ 1921 年 10 月 24 日、久邇宮朝彦親王 30 年祭の際、京都・泉山で（家族らと一緒に）
- 33) 『倉富日記』1922 年 2 月 23 日条。
- 34) ただし、久邇宮の物議を醸すような運動は継続していた。1921 年 6 月 19 日、久邇宮は良子を連れて田健治郎の邸宅を訪問した。岡義武・林茂ほか校訂『大正デモクラシー期の政治』（岩波書店、1959 年）104 頁。つぎの首相としての評判があったための運動であり、原は「宮家に於て各方面に運動らしき事をなすは如何にも苦々しき事なり」と書いている（『原日記』1921 年 7 月 10 日条）。
- 35) 各紙のなかでもっとも皇室写真を扱った『時事』を参照した。
- 36) 『牧野日記』1922 年 3 月 17 日条。
- 37) 『読売』は 1922 年 4 月 4 日付で、結婚が明春〔1923 年 3、4 月〕とほぼ内定しているとしながら、そうであるのに牧野宮相は婚約告示の手続きについて調査もしていないと批判している。
- 38) 『倉富日記』1923 年 1 月 20 日、2 月 6 日の各条。一方、川端康成の日記 1923 年 6 月 10 日条には、「新聞詳しく読む。……良子女王の潮干狩の写真よし」とある。『川端康成全集』補巻 1（新潮社、1984 年）544 頁。
- 39) 『牧野日記』1922 年 6 月 21 日条。この日の記述は、牧野が久邇宮家に赴き、久邇宮夫妻、良子に^{ママ}対面したあと「王殿下へ特に拝謁、今後御態度に付更に申上ぐ」と王殿下にママを付けている。「女王殿下」と書かれるべきところを、「王殿下」と間違えた^{ママ}と編者が判断したのである。しかし、そのあとに続く、新聞などにあまり写真が掲載されないようにとの注意は 18 歳の良子に直接いうよりも彼女を監督する父にいうべきことであること、奥つまり貞明皇后との関係が大切だという記述は久邇宮と貞明皇后との関係を指すと考えられること、などを総合すると、やはり「王殿下」に注意した言葉と解するのが妥当であろう。
- 40) 「皇室、大正 11-13 年」宮城県公文書館所蔵（大正 13 年 0072）。
- 41) 久邇宮家の宮務監督は 1922 年 6 月、栗田直八郎から国分三亥に交代（『東京朝日』1922 年 6 月 22 日）。
- 42) 『倉富日記』1922 年 9 月 6 日、7 日の各条。
- 43) 同上 1923 年 9 月 4 日、5 日、6 日、8 日、17 日、11 月 7 日、1923 年 1 月 10 日、23 日、2 月 16 日の各条。
- 44) 同上 1923 年 1 月 24 日条。

- 45) 同上 1923 年 1 月 23 日条。
- 46) 大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』(弘文堂、2012 年) 837 頁。
- 47) 「良子女王殿下の西へ二千哩^{マイル}の御旅行拝観の記」『婦女界』1923 年 7 月号、62 頁。
- 48) 1963 年 3 月の誕生日における記者への文書回答で、良子は「〔これまでの〕人生で楽しい思い出」の筆頭に大正 12 年春の九州旅行をあげている。高橋紘・鈴木邦彦『陛下、お尋ね申し上げます』(現代史出版会、1982 年) 42 頁。
- 49) 小山いと子『皇后さま』(主婦の友社、1956 年) 41 頁。高瀬広居『良子皇后における人間の研究』(山手書房、1978 年) 66-67 頁。工藤美代子『香淳皇后』(中央公論新社、2000 年) 96 頁。
- 50) 水野新幸『大阪毎日新聞活動写真史』(大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、1925 年) 106-123 頁。
- 51) 同上 107 頁。
- 52) 『婦女界』1923 年 7 月号、69 頁。
- 53) 同上 1923 年 9 月号、270 頁。『富山日報』1923 年 7 月 7 日。
- 54) 紙屋牧子「“皇太子渡欧映画”と尾上松之助」『東京国立近代美術館研究紀要』20 号(2016 年) 35-54 頁。
- 55) 大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編『良子女王御巡遊画報』上下巻(大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、1923 年)。
- 56) 「大正 12 年久邇宮御成関係書」フォルダー名「皇室御来県(昭和 8 年度)」熊本県県政情報文書課管理特定歴史公文書(2012A00001)。同じ文書は、「久邇宮殿下奉送迎事務一件」(地方課)山口県文書館所蔵(戦前 B 人事課 28) および、「久邇宮殿下御来県」奈良県立図書情報館所蔵(奈良県庁文書 S3/110)にもある。
- 57) この旅行の同行者は、父・久邇宮、母・侁子、妹・信子であったが、神戸から門司までの船旅のみ、朝融と末妹の智子女王が同行した。
- 58) 石川欣一「良子女王の御姿を何にたとへやう」『サンデー毎日』1923 年 6 月 3 日号、4 頁。『女性』1923 年 7 月号、口絵。
- 59) 同仁会は中国への医療技術普及のための団体。久邇宮は 1916 年から総裁。
- 60) 『倉富日記』1923 年 1 月 24 日条。
- 61) 同上 1923 年 1 月 25 日条。
- 62) 同上 1923 年 2 月 6 日条。
- 63) 前掲「久邇宮殿下奉送迎事務一件」(地方課)山口県文書館所蔵(戦前 B 人事課 28)。
- 64) 「久邇宮殿下御成一件」(奉送迎及接待係)山口県文書館所蔵(戦前 B 人事課 26)。

- 65) 加藤咄堂「御成婚に際して日本女性を祝福す」『婦女界』1924年3月号、54頁。
- 66) 松田富喬作、38センチメートル×48.5センチメートル。子供は右から成子、和子、厚子の各内親王。良子は、明仁皇太子を出産する直前で、腹部が大きく描かれている。
- 67) 大正の「御成婚」の人出として『時事』（1924年1月27日）は約50万人と書き、『報知』（同日）は60万としている（ただし、『報知』には各場所内訳が掲載されているが、これを合計しても55万人にしかない）。戦後の「御成婚」では53万人という数字が残っている。

本論文は、2015年度成城大学特別研究助成「メディアのなかの『皇族』表象——象徴天皇制の形成・定着・変容との関連」の成果である。なお、本論文作成にあたって各地の公文書館、図書館、文学館に史料の所在調査で協力を受けた。また、大分県別府市の郷土史家、川田康氏には現地調査でたいへん世話になった。この場を借りて感謝申し上げます。